

長寿医療研究開発費 平成29年度 総括研究報告

認知症予防を目的としたグループ回想法の記憶と抑うつ状態に及ぼす効果に関する研究
(29-33)

主任研究者 細川 彩 国立長寿医療研究センター 長寿保健科学研究室 (室長)

研究要旨

平成27-28年度研究開発費(27-19)の助成を受けた主任研究者による先行研究において、認知症対策を目的とした3ヶ月間の定期的なグループ回想法による介入を行い、高齢者のQOL、認知機能、記憶への影響を検証すると同時に、グループ回想で得られたナラティブデータの内容分析を行った。その結果、QOLにおける介入後の変化は見られなかったが、認知機能と記憶遂行課題において有意な改善がみられた。回想のナラティブデータの内容に関してカテゴリ抽出を中心に質的に分析を行ったところ、頻繁に出現するカテゴリから高齢者の語りにおける特徴が示唆された。

平成27-28年度研究開発費(27-19)による先行研究においてQOLに変化がみられなかったが、抑うつと認知症には関連性の報告が多数あるため、介入の効果をより厳密に精査するため本研究では抑うつ尺度を用いる。グループ回想法実施に関しては、集中的な介入を行う。毎回のグループ回想法でのナラティブをボイスレコーダーで記録後テキスト化し、先行研究の結果を踏まえて、カテゴリ抽出を中心とした質的分析も行い、その結果に基づき高齢者の語りの特徴を踏まえた実施方法を考案する。

以上の結果を踏まえて、本研究では、認知症対策としての効果的なグループ回想法の実施方法を開発することを目的に、ナラティブデータの質的分析で得られた内容に基づいてグループ回想法実施方法を考案し、その効果を認知機能、記憶、抑うつ尺度を用いて検証する。同時に、グループ回想法から得られるナラティブデータの質的な分析を行い、認知機能、記憶、抑うつ検査の結果との関連について検討する。

主任研究者

細川 彩 国立長寿医療研究センター 長寿保健科学研究室 (室長)

A. 研究目的

本研究では、高齢者を対象としたグループ回想法の効果的な実施方法を科学的なエビデンスに基づいて開発することを目的に、無作為に対象者を割り付け、高齢者の語りの特徴に沿ったグループ回想法実施方法が認知機能及び記憶や抑うつ状態に及ぼす効果を検証す

る探索的な研究を行う。

B. 研究方法

本研究では、平均寿命の短い自治体において、地域に在住する高齢者を対象としたグループ回想法の効果的な実施方法開発を目的に、回想法実施の際の教示の効果について検証する。自治体との協定締結後、地域在住の高齢者を対象に説明会を開催し参加者を募りグループ回想法を実施する。研究参加への同意が得られた者を対象に、考案した実施方法の下実施されるグループ回想法に参加する群とコントロール群に割り付けた上でグループ回想法を実施する。認知機能検査及び記憶検査と抑うつ尺度を含む①研究開始前検査を実施し、その後定期的なグループ回想法による介入期間を挟んで②研究実施中（グループ回想法前半終了後と後半開始前の間）、③研究終了後（グループ回想法終了後）と、合計3回の検査を実施する予定である。

（倫理面への配慮）

本研究は、倫理・利益相反委員会へ申請し、承認後に研究を開始した。

承認後、調査実施に際し、調査対象者の尊厳と人権を守り、調査対象者が不快な思いをしないよう努めている。まず、調査に先立ち、研究目的と調査内容を口頭及び書面にて十分に説明の上で、理解されたかどうかを確認し、同意を得た。また、調査対象者には、自由意思で参加が決定できるよう配慮し、面接を途中でやめること、答えたくない質問には答えないこと、調査結果の報告を求める権利があること、自己情報アクセス権・コントロール権があることを説明するとともに、研究者は、調査対象者のプライバシーへ配慮し、調査の実施によって不利益が予想される場合には直ちに調査実施計画を中止するなどの適切な手続きをとっている。さらに、参加は強制ではなく任意であることを説明し、調査対象者が調査に対して疑念を持つことなく快く協力できるよう慎重な対応に努めている。

C. 研究結果

本年度は倫理・利益相反委員会への申請を行い、承認を得た。承認後には、対象自治体との協定を締結し、市広報誌、回想法講座説明会、ポスター掲示及びチラシ配布により研究参加者を募集し、説明会を実施した。その後、説明会への参加者から本研究の対象者を確定した。

また、先行研究で得られたナラティブデータの質的な精査を行い、グループ回想法における高齢者の語りの特徴をカテゴリーにより抽出し、当該領域における学会で発表を行い内容分析の方法確立と実施方法考案にむけて検討を行った。

D. 考察と結論

先行研究において、グループ回想法による集中的介入では、認知機能及び記憶におけ

る有意な改善がみられた。本研究では、この結果を踏まえて、グループ回想法で得られたナラティブデータを質的に精査し、高齢者の語りの特徴を抽出し、その特徴に沿って認知症対策となる効果的な回想法実施方法の考案を目指す為、その効果を検証する。

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

1) Hosokawa, A. (2017). Could positive effects of life review on cognition last? The follow-up study on life review in Tome. *Innovation in Aging*, 1, 422.

2. 学会発表

1) 細川 彩. 認知症予防を目的としたグループ回想法が高齢者の QOL に及ぼす影響についての検討 - SF36 による評価とナラティブの内容分析から - .第 59 回日本老年社会科学学会大会. 平成 29 年 6 月 14 日. 名古屋市. (ポスター発表)

2) Hosokawa, A. Could positive effects of life review on cognition last? The follow-up study on life review in Tome. IAGG 2017 World Congress. 24, July, 2017. San Francisco, USA. (Late Breaker Poster Session)

3) Hosokawa, A. Effects of group reminiscence on cognition and memory in later life: Can group reminiscence ward off cognitive impairment? International Conference on Cognitive Science. 2, September, 2017. Taipei, Taiwan. (Talk Session)

4) 細川 彩. グループ回想法が老年期の記憶に及ぼす効果に関する追跡調査. 日本心理学会第 81 回大会. 平成 29 年 9 月 22 日. 久留米市. (ポスター発表)

5) Hosokawa, A. Why could reminiscence ward off cognitive impairment? Content analyses of autobiographical narratives. Psychonomic Society 58th Annual Meeting. 10, November, 2017. Vancouver, Canada. (Poster Session)

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし